通所施設利用高齢者の活動への興味と満足度について

――興味・関心チェックシートを用いて――

作業療法士学科夜間部

【はじめに】

高齢者は加齢に伴い, 社会参加に次いで IADL, ADL の順に生活機能が低下するとの報告がある [1].

本研究では，地域高齢者を対象に，活動の興味の多さと生活満足度を調査し，興味・関心のある生活行為が多いほど生活満足度が高いことを明らかにすることを目的とした．また，興味・関心の高い生活行為の上位 2 つを取り上げ，それらの阻害因子について対象者全員の傾向の有無を探る.

【方法】

本研究の調査は，A 介護予防センターのデイサービス利用者と B 老健のデイケア利用高齢者, 66～92 歳, 男性 10 名，女性 15 名を対象に行った．データの収集方法は，同センターにて半構造的面接を実施した．面接時間は 30~40 分であった. インタビューでは, 興味・関心チェックシートと現在の生活満足度(4 件法)を聴取した．その後，してみたい生活行為のチェック項目の内, 重要度の高い生活行為をニーズとして 2 つ選び, 本人にとっての意味，阻害要因，考えられる解決策を語ってもらった．分析は生活満足度と，興味・関心チェックシートのしている・してみたい生活行為の該当数の関係性を調べた．統計処理はスピアマンの順位相関係数を用いて，有意水準は 5%とした．倫理面への配慮として，大阪医療福祉専門学校卒業研究倫理審査委員会(大医福 第 17-教-19 号)において承認を得て実施した.

【結果】

1. 生活満足度としている・してみたい生活行為の該当数との関連性(表 1)

生活満足度としている生活行為は正の相関が示された(r=0.49(P=0.012))．しかし，してみたい生活行為には相関性は示されなかった.

2. 通所施設利用高齢者のニーズ

ニーズで上位に挙がったのは，「旅行・温泉に行く」「料理をする」「スポーツ」「買い物」であった．本人にとっての意味について，一つの行為それ自体を目的にする方もいれば，他者交流を目的にする方など，同じ生活行為であってもその意味は個々人に違っていた.

	相関係数
している生活行為	0.49(P = 0.012)
してみたい生活行為	0.29(P = 0.159)

(n = 23)

表１　生活満足度と各生活行為の該当数との関連性

3. 自身が考えるニーズへの阻害要因と解決策

阻害要因では，年齢や器質的な《身体機能・身体構造》の理由が最も多かった．解決策では，生活上の補助といった《環境因子》の変化を求める内容が最も多かった.

【考察】

今回の調査で日常的に行われる生活行為の項目が多く，その遂行の可否が生活満足度との相関を示したと考えられる．またしている生活行為が多いほど生活満足度は高くなることが示唆された．してみたい生活行為は，個々人の生活状況や背景，性格等の様々な要素によって各行為への意欲の高さは一定ではないため，該当数の多さでは相関性は示されなかったのではないかと考えられる．してみたい生活行為には生活歴が強く影響していることから，行為の意味は当事者一人一人によって異なる性質を持つと考えられる．高齢者は身体機能を一番の阻害因子として考えているものの，機能の回復には限界を感じていることから環境調整による代償手段を探っており，自分なりの解決策を考えているのではないかと考えられる．作業療法士は通所施設利用高齢者に対して，ニーズだけでなく本人の思考までを聴取した情報収集をすべきである．そして，している生活行為を増やし，生活を充実させていくべきだと考える.

【まとめ】

通所施設利用高齢者は，現在行っている活動が多いほど生活満足度は高くなる相関を示した．ニーズに対しては，身体機能よりも環境の改善によって実現させたいと考えていることが示唆された.

【文献】

1)日本作業療法士協会:平成 25 年度老人保健健康増進等事業 自立支援に向けたリハビリテーションの効果と質に関する評価研究事業　報告書Ⅲ．2013，1-135.